日本建築学会技術報告集　第25巻　第61号，1339-1344，2019年10月
AIJ J. Technol. Des. Vol. 25, No.61, 1339-1344, Oct., 2019
DOI https://doi.org/10.3130/aijt.25.1339

フリードリッヒ・シルバンによるリー・ア・ホン（1968-1969）邸の設計における「オープンベランダ」（「エンペル・テルブカ」）の形成過程

FORMATION PROCESS OF THE "OPEN VERANDA" ("*EMPER TERBUKA*") IN THE REALIZATION OF RESIDENCE OF LIE A HONG (1968-1969) BY FRIEDRICH SILABAN

千代章一郎 ―― ＊1　　ダフニアル ―― ＊2

Shoichiro SENDAI ―― ＊1　　**Dahniar** ―― ＊2

キーワード：
フリードリヒ・シラバン，オープンベランダ，リー・ア・ホン邸，土着性

Keywords:
Friedrich Silaban, Open Veranda, Residence for Lie A Hong, Vernacular

In this paper, the formation process of the "open veranda" in the realization of Residence for Lie A Hong (1968–1969) by Friedrich Silaban were analysed. Using Silaban's archives for this house project, we divided the realization process into four phases. Throughout the plan transformation, we found out that the open veranda was not only the adjustment with the tropical climate, but also the connection to the social and personal life activities. In conclusion, we can say that the open veranda was a mechanism to interpret the indigenous climate and the modern architecture in Silaban's residential design.

1．はじめに

インドネシアの近代主義建築家の第1世代の1人[注1)]であるフリードリヒ・シラバン（Friedrich Silaban, 1912-1984）[1), 注2)]による住宅作品のなかでも、後期の重要作品であるリー・ア・ホン邸（Residence of Lie A Hong, 1968-1969）に着目し、その「オープンベランダ」（「エンペル・テルブカ」）の形成過程について明らかにする。

シラバンは1945年のインドネシア独立後の建設事業、とりわけ国立インドネシア銀行（Bank Indonesia Building, 1954）と国立モスク（イスティクラル・モスク、Istiqlal Mosque, 1955）[2),3),注3)]などの国家的な記念碑的建造物の建築家として著名であるが、同時に多くの住宅作品を手がけていたことが近年わかっている（表1）。シラバンのアーカイブ・コレクションによれば、シラバンは建築家としての職歴のはじめから住宅プロジェクトを設計し始めて最晩年まで断続的に住宅の設計をしているが、自邸や別荘などに加えて、インドネシアという社会の文脈のなかで、店屋[注4)]や公邸[注5)]など比較的特殊な建築類型についても設計を行っており、27の住宅プロジェクトが存在する。

そのなかでも、より制約の少ない自邸という建築類型は、シラバンの住宅作品における設計法が最も端的に採用されていると考えることもできるであろう。

1982年、シラバンは晩年の講演、インドネシア建築家協会の第2回全国大会において、「インドネシアの建築思想と現実」というタイトルでインドネシアの近代建築の理想について語り、非西洋地域である熱帯地方における近代建築の要点を挙げている[4),注6)]。その多くは、近代建築の原理の地域への適応という課題であり、インドやしば国家的なプロジェクトにおいて実現されてきた[3), 注7)]。一方、シラバンは住宅についても言及しており、なかでも「オープンベランダ」は住宅に最も密接に関連した概念として、シラバンの住宅設計における鍵語となっている[4)]。

シラバンは、インドネシアの家で必要なスペースとして人々が愉快に過ごし、談話をし、疲れを癒すための「オープンベランダ」を強調し，社会的空間としてのベランダを常備したインドネシアの先住民の家からインスピレーションを得ていた[4)]。

1930年代から1940年代の住宅プロジェクトでは、オープンベランダはまだ設計要素として確立されていなかった[注8)]。オープンベランダを実現した住宅作品の代表例は、1950年代のシラバン邸（Silaban's house）や1960年代のリー・ア・ホン邸（Residence of Lie A Hong）であり、本稿では後期の代表作リー・ア・ホン邸についてそのオープンベランダの実現手法を分析する。

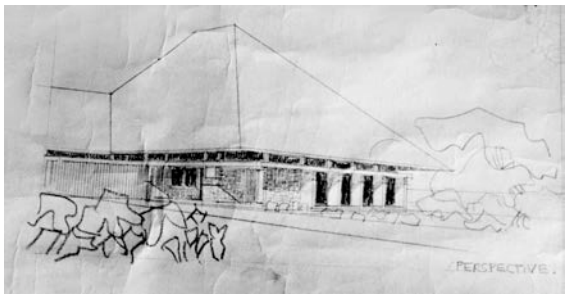


図1 リー・ア・ホンの邸（Residence of Lie A Hong）の正面ファサード（1969年頃）[6)]

*1　広島大学大学院工学研究院　准教授・博士（工学）
（〒739-8527　東広島市鏡山一丁目4番1号）
*2　広島大学大学院工学研究科　大学院生／インドネシア　ハサヌディン大学工学部建築学科　講師・修士（工学）

*1　Assoc. Prof., Graduate School of Engineering, Hiroshima Univ., Dr. Eng.
*2　Graduate Student, Graduate School of Engineering, Hiroshima Univ. / Lecturer, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Hasanuddin Univ., Indonesia, M. Eng.

既往研究において、ソパンディ氏はアーカイブを通してシラバンのデザインを研究し、シラバンの伝記を出版すると同時に、シラバンのアーカイブのオンラインデジタルミュージアムの設立を始めた。ソパンディ氏の研究は、シラバンのデザイン、特に公共建築物とシラバンの住宅についての一般的な情報を提供している。しかし、住宅プロジェクトに関する情報は限られており、簡単な説明しかしていない。リー・ア・ホン邸についても、屋根の形状と実現しなかったシラバンの住宅の計画（1958）との類似性の指摘にとどまり、シラバンのデザインの特徴の一つであるオープンベランダを含むデザインの詳細な説明をしていない[2)]。一方、オダン氏らは、この住宅については既存の計画（1968）のみについて言及し、後の新しい建設プロセスについては分析していない[5)]。それに対して本稿では、現存が確認される設計図面すべてを用いてオープンベランダ（エンペル・テルブカ）の形成過程に焦点を当て、リー・ア・ホン邸の実現について考察する。

２．研究方法

1984 年にシラバンが死去した後、図案や模型に関連する資料は整理されていなかった。 2007 年には、ソパンディ氏をはじめとするアジア近代建築ネットワーク（modern Asian Architecture Network）におけるインドネシア建築に関する国際的なチームがシラバンの作品目録を作成している[7),8)]

表１ フリードリッヒ・シラバンの住宅プロジェクト[2,6,7)]

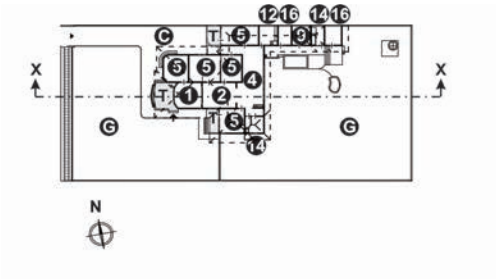
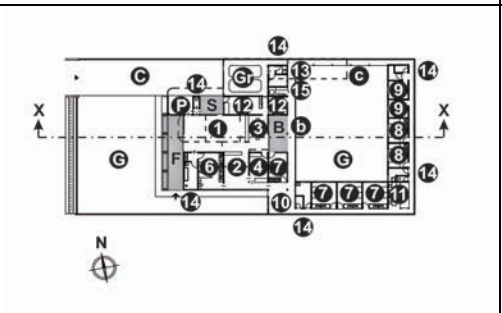
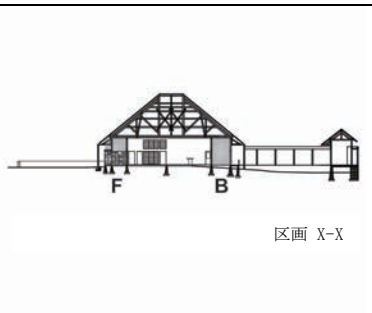
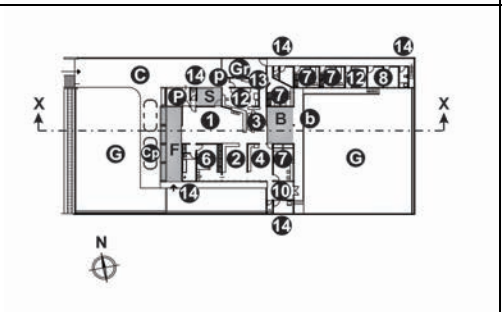
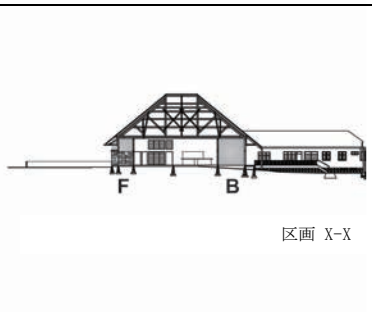
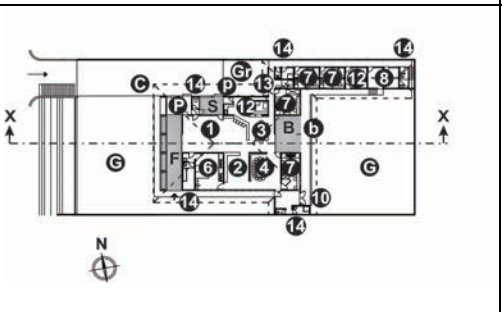
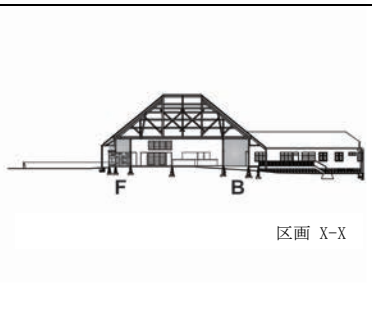
期間	プロジェクト名	設計図面作成年	自邸	公邸	備考
1930 年代 – 1940 年代	ボゴール（*Bogor*）の市長公邸[2)]	1935		＊	
	市長公邸デザインコンペ[2)]	1936		＊	
	コニンインウェグ＝レジェンテスウェグ通り角の家	–	＊		
	N.V.ゲベオ（N.V.GEBEO）の公邸(ボゴールのグヌン・ゲード-マンダラワンギ市辻通)	–		＊	
1950 年代	ラヒム(Rachim)のバンガロー(パチェット町、チパナス市の近く)	–			ヴィラハウス
	ジャカルタの自邸、チャワン通り 199 号	–	＊		屋根のみ
	R.S.マンゴエンセラーナ(R.S.Mangoensoerana)の家（ボゴールのスカジャリ団地、バル通り）	–	＊		
	N.V.ゲベオ（N.V.GEBEO）の公邸(スカブミのグヌンパラン通り)	–		＊	
	ジャカルタ・ライアド団地（ジャカルタのタンジェラン通り）	–		＊	
	ノーディン・イブラヒム(Noordin Ibrahim)の家(ボゴールのチブル郡、ケドン・ハラング通り)	–	＊		
	ジャカルタのケバヨラン・バル P/3	1957 年 2 月 28 日	＊		
	シラバンの家（ボゴールのゲドゥン・サワーII 通り 17 号）	1958-1961	＊		
	N.V.ゲベオ（N.V.GEBEO）の公邸（ボゴールのボンドーンン通り、ドレデド）	1959 年 7 月		＊	
1960 年代	スヒルマン(Suhirman)の家（ボゴールのトゥグ町）	–			ヴィラハウス
	T.D.パルデデ(T.D. Pardede)の家（メダンのシライレンドラ-モジョパヒト隅通り）	–	＊		
	検察庁部（行政官の家）（ジャカルタのケバヨラン・バル CII）	–		＊	
	国立研究部ビル（ボゴールのペジャガラン通り）	–		＊	
	自宅、インドネシア共和国空軍大臣 J.M.（ジャカルタのケバヨラン・バル通り 0/2 号）	–	＊		
	自宅（ジャカルタのジェントラル・ガトット・サブロート通り、(スリピ通り)、ヤソ館）	1962	＊		
	リント・アルヴィ(Rinto Alwi)の家（ボゴールのジャカルタ通り 22 号）	1966 年 4 月 27 日	＊		
	【公邸】パキスタン大使 （ジャカルタのテューク・ウマル通り）	1967 年 2 月 26 日		＊	
	アブドラ・アル・バワハブ(Abdullah Albawahab)小家（ボゴールのチサダネ通り 19 号）	1968 年 1 月 10 日	＊		屋根のみ
	リー・ア・ホン(Lie A Hong)邸(ボゴールのグヌン・ゲード通り 33 号)	1968 年 12 月 31 日	＊		
1970 年代	農業部長官トジブ・ハディウィッドジャヤー(Tojib Hadiwidjaja) のカントリーハウス （ジャカルタのチランダク郡、ケバヨラン・バル町）	–			ヴィラハウス
	ジャカルタのメンテン町のジャンブ通り 38 号	1974 年 11 月 1 日	＊		ゴロエネウェゲン(Groenewegen)，シラバン(Silaban)、マイヤー(Meyer)らの家庭使用契約の計画図
	スチプト(Sutjipto)の家 （ボゴールのケドン・ハラング通り）	1978 年 8 月 11 日	＊		1 枚の図面のみ（実現せず）
1980 年代	ホ・ア・ヘン（Ho A Heng)店家（ボゴールのスリアケンチャナ 294/296 号）	1982			店舗

本稿の研究対象

表 2 フリードリッヒ・シラバンのリー・ア・ホン邸のドキュメントアーカイブ[6)]

リー・ア・ホン邸の設計過程	図面数	図面タイトル	内容	縮尺	署名	備考
既存住宅調査	1	「ボゴールのグヌン・ゲード通り 33 号の住宅の描画. リー・ア・ホン邸. 1968 年 12 月 31 日」	配置図	1:500		既存の住宅の現況図 付：手書きの部分詳細図 インドネシア語で書かれた図面の記法
			平面図	1:100		
			正面立面図	1:100		
			右面立面図	1:100		
			区画 A-A	1:100		
			区画 B-B	1:100		
			区画 C-C	1:100		
初期案	1	「リー・ア・ホン邸の予備設計の図面. ボゴールのグヌン・ゲード通り 33 号.（所有者が与えた）要件に従って」	平面図	1:100	シラバン と インドリアワティ（リー・ア・ホン夫人）	付：建築面積 英語で書かれた図面の記法
			正面立面図	1:100		
			透視図	–		
中期案	1	「インドリアワティ(Indriawaty)邸の第二 2 次予備設計の図面. ボゴールのグヌン・ゲード通り 33 号」	平面図	1:100	シラバン	付：建築面積 付：「客用寝室とトイレを縮小した後の計画」（シラバンによる手書き） 英語で書かれた図面の記法
最終案	1	「インドリアワティ邸の計画.ボゴールのグヌン・ゲード通り 33 号」（No.1）	平面図	1:100	シラバン	付：建築面積 インドネシア語で書かれた図面の記法
			配置図	1:500		
			地下室の平面図	1:100		
	1	「インドリアワティ邸の計画.ボゴールのグヌン・ゲード通り 33 号」（No.2）	区画 A-A	1:100	シラバン	インドネシア語で書かれた図面の記法
			区画 B-B	1:100		
			区画 C-C	1:100		
			正面立面図(西)	1:100		
			背面立面図(東)と区画 F-F	1:100		
			右面立面図(南)と区画 E-E	1:100		
			左面立面図(北)と区画 H-H	1:100		
			区画 G-G	1:100		
			天井の詳細	1:100		
			主要トラスの位置の詳細	1:10		
			背面の建物の鉄筋コンクリート床詳細	1:20		
	1	「インドリアワティ邸の計画.ボゴールのグヌン・ゲード通り 33 号」（No.5）	屋根計画	1:100	シラバン	インドネシア語で書かれた図面の記法
	1	「インドリアワティ邸の計画.ボゴールのグヌン・ゲード通り 33 号」 （No.8）	鉄筋コンクリート屋根詳細	1:20	シラバン	インドネシア語で書かれた図面の記法

表 3 フリードリヒ. シラバンによるリー・ア・ホン邸の設計プロセス [6)]

リー・ア・ホン邸の設計過程	平面図	断面図
既存住宅調査 (1968 年 12 月 31 日)		
初期案 (1969 年頃)		
中期案 (1969 年頃)		
最終案 (1969 年頃)		

凡例：

F フロントベランダ　S サイドベランダ　B バックベランダ　T テラス

C カーポート　Cp 駐車場　G 庭園　Gr 車庫　P 前部ポーチ　p 小さなポチ　b バルコニー

1 リビングルーム　2 シッティングルーム　3 フォーマルダイニングルーム　4 ファミリーダイニングルーム

5 寝室　6 マスターベッドルーム　7 こども部屋　8 客用寝室

9 使用人室　10 こどものシッティングルーム　11 こども勉強部屋　12 キッチン

13 ゲストのドライバー部屋　14 バスルム　15 アイロン室　16 倉庫

↑ エントランス

その後、インドネシアの建築資料センター（Pusat Dokumentasi Arsitektur, PDA）がアーカイブの大半をデジタル化し、それらのいくつかはウェブサイトに掲載されている[9]。しかし、アーカイブの30%程度しかデジタル化されおらず、収集は進行中である[10),注9)]。

著者らは、アーカイブのメタデータ開発のボランティアとしてPDAとarsitekturindonesia.orgと協力し、この論文の主な資料としてリー・ア・ホン邸を含む住宅プロジェクト・アーカイブにアクセスする特別な許可を得た。調査の結果、著者らは、リー・ア・ホン邸に関する7枚の建築図面を確認することができた。図面には平立断面図が併記されたものや、詳細図まで様々な種類がある。日付けの記入されている図面は設計前の既存住宅に関するものだけであるが、すべての図面にナンバリングされているために、図面の作成された順序を確定することができた。そしてオープンベランダの変容という視点から、リー・ア・ホン邸の設計過程を4期に分類することができた（表2）（表3）。

３．リー・ア・ホン邸の設計過程

3.1　既存住宅調査（1968年12月31日）

リー・ア・ホン邸はボゴールのグヌン・ゲード通り33号（現在のパジャジャラン通り）にある[2]。この邸宅の所有者はインドネシア系 － 中国人、リー・ア・ホン氏とその妻インドリアワチ夫人であるが[2]、所有者の職能やシラバンへの設計依頼の経緯は、不明である。

おそらく所有者の最初の要望は、既存住宅の改修である。シラバンはまず、既存の1920-30年代のオランダ植民地時代のスタイル[注10)]を持つ邸宅を調査している。しかしそれ以上の改修計画図面が存在せず、調査の段階で新築する計画に変更されたと思われる。

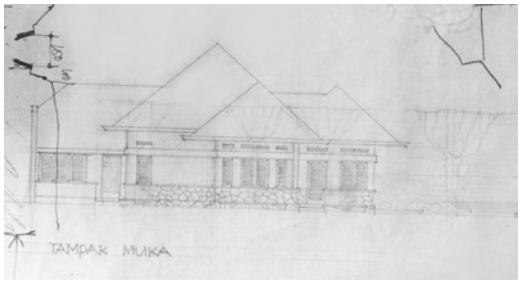


図2 リー・ア・ホン邸の既存計画の立面図（1968年頃）[6]

3.1.1 全体構成

本邸は、主要な居室空間（リビングルーム、シッティングルーム[注11)]、ダイニングルーム、寝室、バスルームとサービス空間（キッチン、使用人室、バスルーム、収納室）から構成されている。

この邸宅は、石造の基礎と鉄筋コンクリート構造であり、主屋は寄棟屋根で粘土タイルで覆われている。また壁には石膏レンガが使用され、木製のパネルドアやブラインド窓である[5]。

3.1.2 3つの既存のテラス

シラバンはこの調査で屋根下の庇空間を「テラス」としている。1つ目のテラスはリビングルームの前にあり、前庭とサイドガーデンに面している。また、寝室の前にあるテラスはサイドガーデンに面し、もう一方のテラスはカーポートに面している。すべてのテラスには、天然石の低いフェンスが設置されている。なお、フロントテラスだけが円柱を持つ。

3.2　初期案（1969年頃）

3.2.1　全体構成

シラバンはおそらく調査の途中段階で、所有者に対して新築の提案をし、予備設計を行ったと思われる。シラバンは所有者のスペース要件[注12)]を満たす新しい設計計画を提案したが、古い邸の前面道路からの後退線（15メートル）を尊重して維持している。

この計画は、2つのヴォリューム（正面の主屋と、背面のL字型の追加の建物）で構成されている。それ自体は既存住宅と同様であるが、主屋は単一の寄棟屋根となり、主屋に付属するプライベートエリアはL字型のヴォリュームとなっている。そしてシラバンはそれらのヴォリュームをバルコニーによってつないでいる。

また平面図には、鉄筋コンクリート柱が使われたことが分かる。正面は、主屋も庇屋根（傾斜40度）で覆われているが、幅が15メートルと大規模になっている。そして自然石が平らな庇の下の壁を覆っている。

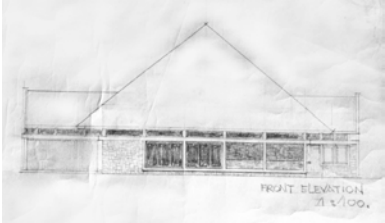


図3 リー・ア・ホン邸の初期計画の立面図（1969年頃）[6]

3.2.2　3つのオープンベランダの提案

シラバンは既存の小さな「テラス」を新しい計画として正面、側面、背面の3つの「オープンベランダ」として構想している。正面と背面のベランダは分離されているが、リビングルームとフォーマルダイニングルームを介してつながっている。

屋根を5つの長方形の列柱で支えるフロントベランダはリビングルームの前に伸びており、マスターベッドルームは前庭とサイドガーデンに面している。この初期案では、シラバンは、西の向きに起因する午後の熱に対して保護された空間としてのフロントベランダを研究している。シラバンによると、十分な大きさがないベランダは本物のインドネシアの家ではない。このオープンベランダは座ったり、話したり、リラックスするための最も楽しい場所でなければならない[4),注13)]。そして床の一部が直射日光の影響を受けないような広い日除けを備えたフロントベランダが備わっている必要がある[4),注14)]。そしてフロントベランダの幅、柱の大きさと列の間隔が等しくあるべきだとするが、その判断の基準は明らかではない[4),注16)]。

バックベランダはフォーマルダイニングルームとこども部屋とバルコニーでつながっている。バックベランダとバルコニーの間には柱が1つある。

シラバンによると、一対のフロントベランダとバックベランダは理想的な住宅の一つである。第二次世界大戦前のオランダ植民時代のスタイルに見られたそれは、自然換気による熱帯気候条件の解決策であった[4),注15)]。

さらにシラバンは、カーポートに面したところに小さなサイドベランダを付け加えた。このサイドベランダは、キッチンとリビングルームのプライベートな通路として機能する。

3.3　中期案（1969 年頃）

3.3.1 全体構成の変更

初期案の後、シラバンは客用寝室、バスルーム、こどもの勉強部屋とゲストのドライバーの部屋を減らした次の構想を示した。プライベートエリアのＬ字型の建物をＩ字形へ変更し、位置を逆転させる。しかし一方、主屋の配置の若干の変更はあるものの大きくは変わっていない[注 17)]。なお、シラバンは平面だけを描き新しい立面は描かなかったために、断面構成については不明である。

3.3.2　バックベランダの拡大

フロントベランダとサイドベランダは変更はなかったが、バックベランダは奥行きが増し、面積は 25,5m^2 に拡大している。そして、かつてはつながっていなかった２つのダイニングルーム（フォーマルとファミリーダイニングルーム）と空間的に連続している。

バックベランダは、社会活動とゲストとつなぐだけでなく、食事によって家族の個人的な生活もつなぐ。バックベランダから裏庭への景色も、裏庭の建物に邪魔されることがなくなる。

一方で、正面の庭園は客人のための駐車場をあらたに計画したために小さくなり、フロントベランダからの眺望を阻害している。

3.4　最終案（1969 年頃）

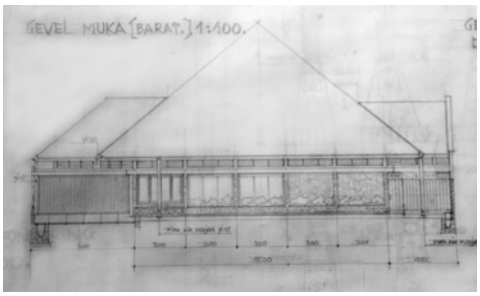


図 4 リー・ア・ホン邸の初期計画の立面図（1969 年頃）[6)]

3.4.1　全体構成の変更

中期案の後、シラバンは最終案となる図面を作成した。シラバンは正面の駐車場を歩道に変更し、正面を自動車によって遮られることのない空間とした。主屋の空間は大きく変更はされていない[注 18)]。

最終案の構想に基づいて、石造の基礎と鉄筋コンクリート造の駆体、漆喰の壁、そして粘土タイルで覆われた木製トラスの屋根によって建設されている。

3.4.2　オープンベランダの連続性

ベランダの構成は変更されていない。フロントベランダに関しては、屋根を支える柱の太さを含め、ほぼ最終案通りに実現されている。バックベランダは奥行きの縮小によってやや狭小した。サイドベランダの面積もやや狭小している。

しかし駐車場をなくしたことによって、フロントベランダから正面のガーデンへの景色は、オープンカーの駐車場に妨げられず、連続的につながることになった。またシラバンは、フロントベランダの断面構成を修正し、日除け装置としての５つの長方形の柱と平らな庇を組み合わせた基壇部分を高くし、やわらかに囲われた滞留場所をつくりだした。

4. おわりに

リー・ア・ホン邸の設計過程において、シラバンは既存の植民地邸宅の小さなテラスを現代的に解釈し、新築の３つの案において邸宅の前後に大きなオープンベランダに展開し、小さなサイドベランダを追加した。これらの３つのベランダによって、前庭、フロントベランダ、リビングルーム、フォーマルダイニングルーム、バックベランダ、裏庭からなる家の中心に縦軸の構成を形成し、それらの間を接続していることは、すべての時期において共通している。

しかしながら初期案では、ゲストルームがその軸線を北側で遮り、中期案では駐車場がその軸線を南側で遮っている。それに対して最終案では、敷地の外部、敷地内の庭園、前後のオープンベランダ、室内を結ぶ軸の構成によって、よりシームレスにつながっている。

その結果、オープンベランダは熱帯の気候を調整する機能[注 14)，注 15)]を持つだけではなく、社会活動と個人的な生活の営みをつなぐ仕掛けの空間になっているのである。シラバンの住宅設計における複数のオープンベランダから成る１軸構成は、土着の気候・建築様式を現代的に解釈する重要な仕掛けの一つであったと考えられる。

謝辞

本研究は、インドネシア共和国財務省のインドネシア教育（LPDP）奨学金によって支えられた。また、セティアディ・ソパンディ氏（Setiadi Sopandi）とフリードリヒ・シラバンの家族（Friedrich Silaban’s family）に深く感謝します。

参考文献

1) Tjahjono, G. (ed), et al: Indonesian Heritage: Architecture, Archipelago Press, 1998
2) Sopandi, S.: Friedrich Silaban. PT. Gramedia Pustaka Utama, the 1st edition, 2017 (In Indonesian)
3) Sopandi, S.: Indonesian Architectural Culture during Guided Democracy (1959-1965): Sukarno and the Works of Friedrich Silaban, In Vu, T. and Wongsurawat, W. (ed): Dynamics of The Cold War in Asia: Ideology, Identity, and Culture, Pelgrave McMillan, 2009, pp. 53-72
4) Silaban, F.: Idealisme Arsitektur dan Kenyataannya di Indonesia (Architectural Idealism and the Reality in Indonesia) in Budihardjo, E. (ed): Menuju Arsitektur Indonesia (Towards Indonesian Architecture), the 1st edition, Alumni, 1996, pp. 75-89 (In Indonesian)
5) Odang, S.A, et al.: Arsitek dan Karyanya: F. Silaban dalam Konsep dan Karya (Architect and His Works: F. Silaban in Concept and Works), Nova, 1992 (In Indonesian)
6) Silaban, F.: Silaban’s Achieves Collection for the residential projects, 1930s-1982, 2017 年 5 月 8 日に著者によって電子化された
7) modern Asian Architecture Network: Silaban Archives Catalogue, http://www.m-aan.org/index.php/site/publicationdetail/silaban_archive_catalogue/ (accessed 2016.12.0
8) modern Asian Architecture Network Indonesia: Rumah Silaban (Silaban’s House), mAAN Indonesia publishing, 2008, online http://www.konteks.org/buku-digital-rumah-silaban-dirilis (accessed 2016.12.11)
9) Pusat Dokumentasi Arsitektur Indonesia: Friedrich Silaban’s digital archives, http://www.arsitekturindonesia.org/arsip/arsitek (accessed 2017.03.12)
10) Sopandi, S: Not All Images were Scanned (Belum Semua Gambar Di-Scan), Tempo Magazine, 3 September 3rd, 2017 (In Indonesian), https://cungss.wordpress.com/2017/12/02/belum-semua-gambar-di-scan/img_5826/#main (accessed 2018.04.04)

出典

図 1　Silaban, F.: Silaban's Achieves Collection for the Residential Projects (1930s-1982): Residence for Lie A Hong, 1968-1969

図 2　同上

図 3　同上

図 4　同上

表 1　Silaban, F.: Silaban's Achieves Collection for the residential projects, 1930s-1982, 2017 年 5 月 8 日に著者によって電子化された; modern Asian Architecture Network: Silaban Archives Catalogue, http://www.m-aan.org/index.php/site/publicationdetail/silaban_archive_catalogue/ (accessed 2016.12.01); Sopandi, S.: Friedrich Silaban. PT. Gramedia Pustaka Utama, the 1st edition, 2017 (In Indonesian)

表 2　Silaban, F.: Silaban's Achieves Collection for the residential projects, 1930s-1982: Residence of Lie A Hong, 1968-1969,

表 3　筆者作成

注

注1)　インドネシア独立後初期に、オランダ人ではない最初のインドネシア人建築家が登場した。この世代は、彼らの建築的な教育と建設事業経験によって 2 つのグループに分けられる。 第 1 のグループは、1930 年代に専門知識を得て、オランダの建設会社のスタッフとして訓練を受けた建築家が典型的である。 第 2 のグループは、バンドン工科大学の新設建築学校で学んだ建築家である。フリードリヒ・シラバンはスシロ(Susilo)とスハミール(Suhamir)は同じ最初のグループに含まれる。(Tjahjono, et al.,1998:129)。

注2)　シラバンは 1912 年 12 月 16 日生まれで、1927 年にインドネシアにおけるオランダ技術高等学校（KWS）に入学して建設技術を学び、1931 年に卒業した。卒業後はオランダ政府の職員として働き、個人的な建築実務もおこなっていた。いわゆる大学教育は受けていなかったが、1950 年にアムステルダムの建築アカデミーにおいて 1 年間の研修の後に建築家職業証明書を取得した。

注3)　1953～1956 年の間に、メダン・メルドカ地域開発のための 3 つの国家建築（国立モニュメント、国立モスク、国立インドネシア銀行）の設計競技が開催された。フリードリヒ・シラバンは国立インドネシア銀行（1954）と国立モスク（1955）に勝利して実現した後、スカルノ大統領時代の多くの建築プロジェクトに携わった。ボラビルディング(1961)、バンテングホテル(1962)、西パプア解放記念碑(1962)など、多くの建築プロジェクトに携わった。(Sopandi, 2009, 2017)。

注4)　インドネシアの店屋は、中国の島々の集落の歴史と密接に関係している。中国南部からの多くの移民がインドネシアの中国人店屋の出現に影響を与えた。店屋のテラスは 狭い通りによって区分けされている(Tjahjono, at al.,1998:114-115)。

注5)　政府の住宅所有者は、公共施設や雇用者のための住宅を使用する国営企業を指す。

注6)　シラバンはこの全国会議において、熱帯諸国でのデザインのために 7 要点を列挙した。: 1) 気候の影響による屋根の重要性 2) インドネシアの住宅に必要な空間である「オープンベランダ」(エンペル・テルブカ）の設置 3) 簡素で明快な「理想的な建築形態」4) 雨漏りを起こさない「屋根材」、形状、構造 5) 良質の「材料」6) 熱帯の特徴と現代的建築様式の調和。7) インドネシアにおける建築物への 無駄な「空調」の使用。そしてシラバンは、講演の最後に理想的な家の基準を定めている:「上記の私の見解を理解できれば、私が何を理想的な住まいとしているのかすぐにわかることでしょう。: 1」住まいは日陰をつくるベランダに囲まれ、最低 4 メートルの高い天井に覆われていなければなりません。 2) それが経済的に不可能な場合の住まいには、広い庇と、直射日光の影響を受けない床、限られた大きさの voorgallery（フロントベランダ）が必要です。 3) 更にコストがかかり過ぎる場合: 住宅は十分な庇を持つべきですが、voorgallery（フロントベランダ）の大きさを制限します。 4) 住まいは簡素な屋根形態と耐久性のある屋根材を使用しなくてはなりません。5) 住まいは屋根のふき替えが簡単にできるタイルを用いる場合を除き、いつも雨漏りしないようにしなければなりません。」(Silaban, 1982)。

注7)　ル・コルビュジェのチャンディーガルとルシオ・コスタとオスカー・ニーマイヤーのブラジリア（1956）による近代建築作品等を指す。

注8)　シラバンは、1930 年代から 1940 年代にかけて住宅の図面計画プロジェクト、コニンインウェグ＝レジェンテスウェグ通り角の家と N.V.ゲベオ公邸においては、オランダ語の「テラス terras」という言葉を使っている。

注9)　プリハンドコ（Prihandoko）氏（『テンポ』誌(*Tempo magazine*)のジャーナリスト）によるセティアディ・ソパンディ(Setiadi Sopandi)氏に対するインタビューでは、全てのアーカイブはまだデジタル化されていない。約 1500 のシラバンの図案のアーカイブから、およそ 500 のみがデジタル化されている。(2017 年 9 月 3 日)

注10)　インドネシアの 1920-30 年代の一般的なオランダの植民地時代の住居は、中流階級住居として設計された。 基本的なモデルは、比較的小規模な 1 階建ての戸建て住居であり、タイル張りの屋根、木造の小屋組、石造りの壁、チーク材の窓、石の基部から構成されている。かつては屋根を支える柱によって比較的広い半野外空間がつくられていたが、この時期には小規模化している（Tjahjono et al.1998:124-125)。

注11)　一般的に「シッティングルーム」は客人と共有する居間であるが、シラバンはむしろ家族用の居間を「シッティングルーム」としている。

注12)　シラバンは、図面タイトルに「(所有者が与えた）要件に従って」と書いている(表 2 参照)。しかしその具体的内容については記していない。

注13)　1982 年のシラバンの講演:「ある町から別の町に車を走らせて農地を渡って地元の家を見ると、ほとんどの家屋は道路の正面にベランダがあります。 我々は、これらのフロントベランダに一日中居住者が座っている姿を見かけます。 彼らは夜には、壁に囲まれた家の中に入るのでしょう。 したがって、十分に大きなオープンベランダがない家（庇の付いた狭いベランダのみではありません）は、真のインドネシアの住まいではありません。私にとってオープンベランダは家の開かれたところで座ったり、談笑したり、疲れを解放する最も楽しい場所の記号に見えるのです。」(Silaban, 1982)

注14)　1982 年のシラバンの講演:「最も重要なことは、壁を建てずに日射を床に届かないようにすることです。しかし太陽光を防ぐために、長く伸びた屋根を壁面線を超えてつくることができます。こうすることで、太陽光が壁に届かないようにできます。」(Silaban, 1982)

注15)　1982 年のシラバンの講演:「多くのオランダ人（第二次世界大戦前）が大きな部屋と高い天井の家を建てたのは驚くべきことではありませんでした。 加えて、彼らは住居で囲まれた 4 方向のベランダか、少なくとも同程度の大きさの 1 つの大きなフロントベランダ(voorgalery)と 1 つのバックベランダ（achtergalery）をつくりました。 寒冷の居住地からインドネシアのような熱帯地域に来るオランダ人は、大きな部屋や高い天井だけでなく、voor(フロントベランダ)と、achtergalery（バックベランダ）の重要性をすぐに理解しました。 彼らは、これらすべてのことを熱帯諸国の住まいにとって基本的な要素と考えたのです。」(Silaban, 1982)

注16)　1982 年のシラバンの講演:「多くの建物は、自由な［壁面から自立した］柱列の使用によって構成されます。 私は、これらの柱列がオープンスペースを囲むか、その前に立つことを示そうと思います。 柱列と境界線の領域の間の距離は、十分に大きく、柱の大きさと列の間隔は等しい。そして自由な柱が大きな *voorgalery*（フロントベランダ）の前に立っています。(ムルデカ宮殿、ジャカルタ州立宮殿とボゴール宮殿のように)」。(Silaban, 1982)

注17)　キッチンの 1 つは、使用人室の近くに、また洗濯室のアイロン掛けスペースは車庫エリアに移動した。加えて、こどものシッティングルームはバスルームを追加したため小さくなり、主屋とプライベートエリアをつなぐバルコニーは幅が広くなった。

注18)　アイロン室はこども部屋のためにトイレの隣に移動し、隣にあるこども部屋の形は長方形へ変更された。また、こどものシッティングルームとバスルーム（6.27m²）の面積も縮小した。

［2018 年 9 月 25 日原稿受理　2019 年 2 月 15 日採用決定］